

# 岡田憲治さん

(専修大学教授)

## ニッポンは言葉が足りなさすぎる

「投票しても世の中変わらない」という虚無感がはびこりがちなニッポン。投票率が五〇パーセント台の選挙も続いた。こうしたニッポンの政治状況に足りないものは、私たちの「言葉」だった」。この夏の参議院選挙を振り返りつつ、政治における言葉の重要性について、政治学者の岡田憲治さんに聞いた。

自民党は本当に大勝したのか？

——七月の参議院選挙では、自民党が大きく議席を伸ばしました。この結果を、どう見ますか？

もう皆さんお忘れかもしれませんが、二〇〇七年の参議院選挙では民主党が第一党に躍進し、このままの支持率で衆議院選挙になだれ込んだら、本当に政権交代が起こる——そんな予感を抱かせる選挙でした。

それが実現したのが、二〇〇九年の衆院選だったわけですが、こうした一連の流れへの反動が劇的なかたちで現れたのが昨年の衆院選で、今回の参院選の結果

はそうした流れが確定したことを表している。そう考えることができると思います。

一人区の多い参議院地方区にしても、衆議院の小選挙区にしても、いまの選挙制度は、投票者の五パーセント足らずの票が政党間を歩き来するだけで、選挙結果の激変に結びついてしまうという特徴があります。今回も、実際の選挙結果に影響を及ぼしたのは、投票率約五二パーセントのうちの一〇パーセント以下でしょう。それこそ棄権者を含めた全有権者から見れば五パーセントに満たないはずです。

参院選の地方区で、改選議席一の一人区が置かれるのは、人口が少ない地方です。

今度の選挙では、三十一ある一人区のうち二十九区で自民党が勝っていますが、地方では、前回の選挙では「手厚い農家の保護をやる」と言ってるんだから」といった理由で民主党を一時的に支持した人々が、今回の選挙がなかったために自民党に戻ってきたというパターンが多いのではないかと思います。一九五五年の結党以来、五十年以上も与党であり続けた自民党の地盤は、そう簡単になくなるものではありません。東京や大阪と違って、候補者の選肢が極端に少ない地方

では、高齢者などは投票用紙に「自民党」としか書いたことがなかったりするわけです。しかも、そういうこと

——結局、参院選で私たちは何を問われ、何を選んだのでしょうか？

原発推進や改憲、消費増税やTPPなど、大きな争点はいくつもあつたはずですが、それらがまともに議論されて、国民に是非を問う選挙であつたかどうかは、甚だ疑問です。

二〇〇五年の衆院選などは、「郵政民営化の是非が問われた選挙だった」とされますが、しかしあの選挙の時点で、郵政民営化の目的や、それによって起こるであろうことを説明できた人は、ごく一部の専門家だけでした。実質的な議論を経て国民に是非が問われたの

たこと

「民主党オワタ」では終われない

たこと

たこと



●おかだ・けんじ 一九六二年東京生まれ。専攻は現代デモクラシー理論。著書に『働く大人の教養課程』（実務教育出版）、「静かに「政治」の話を続けよう」『言葉が足りない』とサルになる』（ともに亜紀書房）、などがある。